

湘南の由来とエリアを探る

その 11

湘南発祥の地/大磯 - 1

—西行・崇雪・三千風—
和田精二

1, 平安末期、遊行の歌人西行が奥州へ旅した途中、大磯辺りを訪れ、「心なき身にもあはれは知られけり 嶋立つ沢の秋の夕暮」という句を詠んだ。この句を詠んだ年には2説あるが(1143年/西行26歳、1186年/西行69歳)、特定されていない。同様に、詠んだ場所についても2説あるが(鵜沼から大磯までの海岸とする説と砥上が原【現在の藤沢市大庭】とする説)特定されていない。

著 盡 湘 南 清 絶 地

11-1 はじめに

「湘南」の由来について調べてきましたが、ようやく湘南発祥の地とされる大磯にたどり着きました。ぐだぐだいてないで早く大磯について書けと叱られたこともありましたが、ともかくその大磯について調べる機会の到来です。

湘南はどこからどこまでという論争になると、山の手や下町のような表現同様に各人各様の定義が存在し收拾がつかません。ところが、発祥地はどこだとすると、大磯に異議を唱える人に会ったことがありません。理由は明快。小田原の崇雪によって「湘南」という2文字を刻まれた標石が大磯に現存しているからで、これに代わる物的証拠が出てこない限り、今流に言えば知財権的にも大磯発祥地説は微動だにしないようです。

さて、中国湖南省などの場合は関連情報探しに苦労しましたが、大磯となると湘南発祥1丁目1番地とあって、関連情報がガイドブックからブログに至るまで満ち溢れています。ここで紹介するのも気が引けるほどですが、湘南の由来というフィルターを通して調べた結果を綴ります。



図1 嶋立庵の門口と標石

11-2 湘南発祥の地の物語は単純明快

大磯が湘南発祥の地であることの説明は、本やネットに展開されている情報を集め、3人の人物と2か所(嶋立沢と嶋立庵)の絡みを整理整頓すれば宜しいようです。以下に要点を列記してみます。

心なき身にもあはれは知られけり 嶋立つ沢の秋の夕暮
(西行法師 山家集 470、新古今集 巻4秋)

2, 小田原の崇雪という人物が、西行寺の建立を夢見て石仏の五智如来像を大磯に運び、草庵を結び、嶋立沢に標石を建てた。その碑の裏側に刻まれた文言「著盡湘南清絶地(あきらかにしょうなんはせいぜつをつくすのち)」が、大磯が湘南発祥の地であることを実証することになった。現在、この標石は大磯町郷土資料館に保管され、レプリカが嶋立庵に立っている。

3, 崇雪が嶋立庵を結んでから約50年後、庵の後継者として請願された大淀三千風(紀行家、俳諧師)が痛んだ庵を補修し、嶋立庵の初代庵主として入庵した。嶋立庵に隣接した秋暮亭は日本3大俳諧道場の1つとして現在に至っている。そして、

敷地内の円位堂に三千風によって安置された西行の座像が、今も立膝姿で座っている。

以上の内容で湘南発祥の地大磯について大雑把な理解は可能ですが、なぜ西行は鳴立沢で歌を詠んだのか？ 崇雪とはいかなる人物なのか？ なぜ崇雪は鳴立沢に草庵を結んだのか？ 等々の疑問が湧いてきます。

11-3 なぜ西行は鳴立沢に立ち寄った？

今回の調査を通して気付いたのは、こじんまりとしたエリアでありながら、歴史的な史跡に恵まれた奥行き深い大磯の魅力でした。大磯が発展したのは、東海道に沿って展開した大磯宿の時代と著名人が集った明治の別荘地文化の時代です。西行が立ち寄ったのは平安末期。この時代に、なぜ西行が大磯に立ち寄ったのか、考えてみるのも楽しそうです。



図2 西行を信奉した一遍上人、世阿弥、松尾芭蕉

僧侶などが布教や修行のために諸国を巡り歩くことを「遊行」といいます。中世になると現実社会の権力や財産を捨てて、山裾に庵を結んだり、旅を住処にしたりすることで仏の道に近づこうとする僧侶が出て来ました。やがて、僧侶でもないのに「遊行」という生き方をライフスタイルとして真似る人々も沢山出て来るようになります。続いて、仏の道を目指すというよりも、世をはかなむ生き様を美意識として高めていくような人々も登場して来ます。その代表的な人物が、「歌枕」をめぐる諸国を遍歴した能因法師であり、武家を捨てて歌に遊んだ西行でした。

祖先が藤原鎌足という由緒ある家系に生まれ、名誉ある「北

面の武士（同僚に同じ年の平清盛）」として未来を約束されながら突如出家し、遊行の人として諸国を巡り歩き、歌を詠んだ西行（本名佐藤義清）は、平安末期最高の歌人でした。

「無常（はかなさ）」と「数寄（風流・風雅）」の感覚で生きた西行は、一所不在、無住の遊行人たちから大きく信奉されました。民衆のあいだに踊り念仏を広めた一遍上人は西行を遊行の先駆者として信奉し、世阿弥も西行を主人公とした能をつくり、松尾芭蕉も西行をまねて日本を旅して「奥の細道」のような俳句をつくりました。

鳴立庵を訪れて歌を詠んだ西行、西行を信奉し鳴立沢に西行寺の建立を夢見て鳴立庵を創設した崇雪、鳴立庵の初代庵主として庵を再興し、庵内の円位堂に西行座像を安置して祈念した大淀三千風、この3人に通底していたのが「無常」と「数寄」の感覚であったように思えます。湘南発祥の地が大磯であることを理解するための一助として鳴立庵を媒介とした3者の相関を図にしてみました。

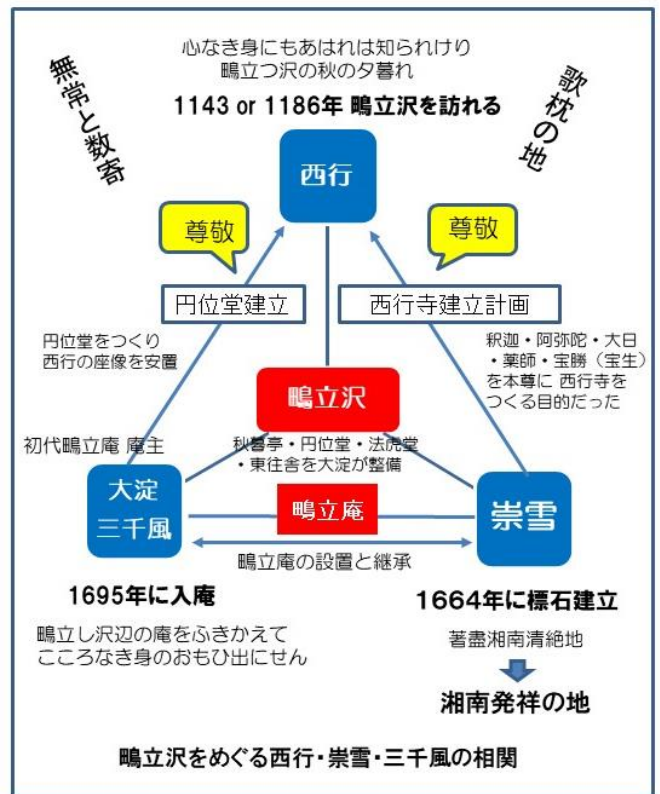


図3 西行・崇雪・三千風による鳴立沢の相関図

11-4 大磯は「歌枕」の地

遊行の人々の内、出家頓世した遊行人やもとの身分が貴族や武士に共通していたのが、「無常」や「数寄」の感覚と彼ら

の大半が和歌を詠んだことです。当時は和歌を詠むことは、「歌枕」(和歌の題材となる諸国の名所)を求めて歩くことに直結しました。なぜ西行が奥州へ旅した途中、嶋立沢に立ち寄って歌を詠んだのかを考えると、「歌枕」という視点も交えて考える必要があります。

さがみじの よろきのはまの まなごなす
 こらはかなしく おもはるるかも
 (作者不詳 万葉集 巻 14 東歌 相聞)

この歌は万葉集の東国庶民の歌を集めた「東歌」に出て来る一首です。「よろき(余呂伎)のはま」は、古代の大磯から国府津にかけての浜を指します。「よろき」は「こよろぎ」「こゆるぎ」と同意語で、「こゆるぎの浜」「こよろぎの磯」という様に、浜や磯にかかる枕詞となっていますが、「こゆるぎ」は「歌枕」にもなっているのです。ということで、大磯の海岸を訪れることは、「歌枕」の地を訪れることになります。遠い万葉の昔から数多の勅撰和歌集や和歌集、あるいは風俗歌、紀行文、日記類の中に現れるこゆるぎの浜やこゆるぎの磯は、西行だけでなく、崇雪、大淀三千風にとっても、大きな意味を持っていたことが窺い知れます。



図 4 相模国「洵綾(ゆるぎ)郡」(古代律令制下では余綾(よろぎ)郡)と表記された

11-5 嶋立沢はどこにあった？

西行が詠んだ嶋立沢の位置については冒頭で述べたように2つの説があり、確定していません。大磯町文化史編纂委員会編集の書籍(昭和 31/1956 年発行)に次のような記述があり

ます。

『この大磯町の嶋立沢と西行の詠んだ嶋立沢については種々の異論のあるところであるが、聖護院宮道興准后「廻国雑記」(文明 18 年、1486 年)によれば、「嶋立沢に至りぬ、西行法師ここにて「心なき身にも哀れ」と詠ぜしより、此所をかくは名づける由」。里人語り侍りければ、あわれなる人の昔を思ひいでて嶋立沢を泣く泣くぞとふ。』とあるので室町時代にはすでに、同一視していたのである。これを三千風が入庵してより更に宣伝したので現在一般の人々は常識的に同一のものと信じ切っている。大磯における嶋立沢の位置については、始めは現在の地ではなく、現地より上流 2 町程の東小磯字大門辺富士見橋から嶋の井戸の附近を指して居たように言われている。』「大磯町文化史」1956

要するに、嶋立庵が大磯にあったのか、藤沢(大庭)にあったのかという問題に対して、室町時代にはすでに大磯説が大磯では一般的であったこと、位置の違いがあるといっても、せいぜい 2 町(200m 強)程度であり、現在では一般の人は常識的に、西行の嶋立庵は大磯と信じ切っていると強調しています。



図 5 嶋立庵、こゆるぎの浜

一方、嶋立沢とは現在の位置から数丁も川上にある「死木立沢」と呼ばれた墓地であるという説もあります。「大磯学」2013 そこには数多くの塔婆(死木)が立っており、そこを訪れた西行が沢から飛び立つ嶋をみた瞬間、インスピレーションを受けて詠んだのが「心なき…」の歌であり、嶋にも「しぎ(死気)」が掛かっているように思える」とあります。説得力のある説に思えますが、嶋立沢が「歌枕」になっていることを考慮すると(デジタル大辞泉他)、この説の信憑性についてはにわかには信じがたいものがあります。

11-6 西行の和歌の解釈

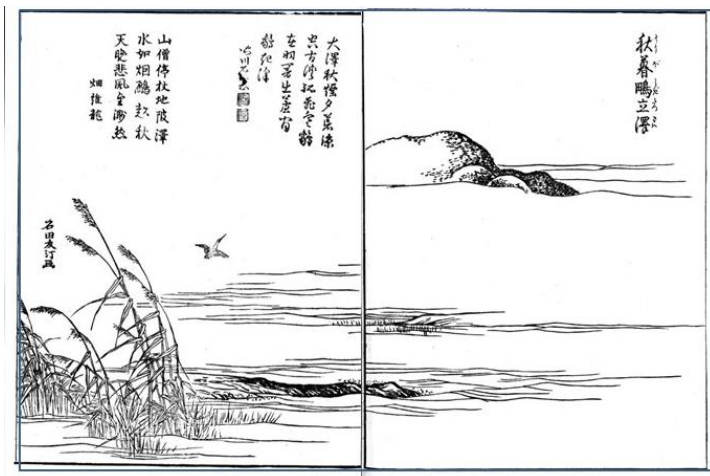


図6 東海道名所図会 石田友汀画「秋暮鳴立沢」

念のため、西行が詠んだ歌の解釈を書いておきます。解釈は様々ですが、最も腑に落ちたのが以下の解釈です。

『わたしの感じでは、この歌は、自分のいたらなさを嘆いているというよりも、鳴たつ沢そのものもつ「あわれ」に立ち会って、自分で想像もしていなかった新しい感動に触れたかのような印象である。そしてまた、その感動を発見した自分を意識しているように思われる。西行は、今まで思っても見なかった新しい「あわれ」という感動に触れたのであり、その「あわれ」に触れることが出来たのが「心なき身」であることを知ったのである。その感動をひきおこしたものが、それが体言止めで言い切られている「鳴たつ沢の秋の夕暮」であった。』 「西行の風景」 桑子敏雄 1999

11-7 再び鳴立沢の位置について

因みに、鳴立沢の位置の特定について白洲正子が「西行」の中で以下のように書いているので引用しておきます。

『歌枕というのは実に不思議なものである。(略)たとえば、「鳴立沢」のように、はじめは不特定の場所であったのが、西行物語では、相模の国大庭郡砥上原(今の鵜沼から藤沢のあたり)に設定され、ついで小磯に変わって現在に至っている。(略)昔は大磯・小磯と並び称された風光明媚の地で、数寄者たちが集まって、風雅な遊びにふけている間に、鳴立沢の歌枕ができ上がって行ったのだろう。早くも室町時代には、その地名は行き渡っていたというから、もはや1つの歴史と呼んでもさし支えないのである。何も正しいことだけが、歴史とはいえない。私たちが正しいと信じている公家の日記や史書にしても、そこに人間が関わっている以上、個人的な感情や利害からまったく

自由であるとは言い切れない。そのことに思いを及ぼす時、たとえ架空の存在であるにせよ、昔をなつかしむ心がつくり出したもの、—しかもそれが何百年もの間信じられ、愛されて来たものならば、そのことだけでも私には立派な歴史のように思われる。もし、歴史と呼んで悪いのなら、私たちの祖先が愛惜して止まなかった文化の表徴であったことは確かである。』

11-8 白洲正子が愛した大磯

白洲正子のかなり大磯寄りの発言については、次の文章を読むようになるほどと理解できます。「私の鳴立沢は、やはり大磯のあすこ以外にない。」といい切る言葉の中に「歌枕」の地・大磯に対する愛着を感じます。

『そのかわりに小川が流れていて、小さな橋がかかっている。小川というより溝に近いが、これがいわゆる鳴立沢の沢なのであろう。橋を渡ったすぐ右手に、昔、私の祖父が住んでい



図7 白洲正子著「白洲正子自伝」表紙

た。庭に二股に分かれた大きな松があったので、「二松庵」と名づけ、別荘というより庵室めいた住居であった。祖父は海軍の軍人で、早くに隠居してそこで静かな余生を送っていたが、なぜ鳴立庵を終焉の地にえらんだか私は知らない。が、いつも黙々と、ちびた筆を舂めながら、漢詩を作っていた姿が印象に残っているのをみると、多少は古典文学に興味を持ち、西行の生き方に共鳴していたのかもわからない。「二松庵」という詩集を遺しているから、しらべてみたらその片鱗ぐらいはつかめるであろうが、身内のこととなると私は照れてしまう性分なので、ろくに読んだこともないのである。

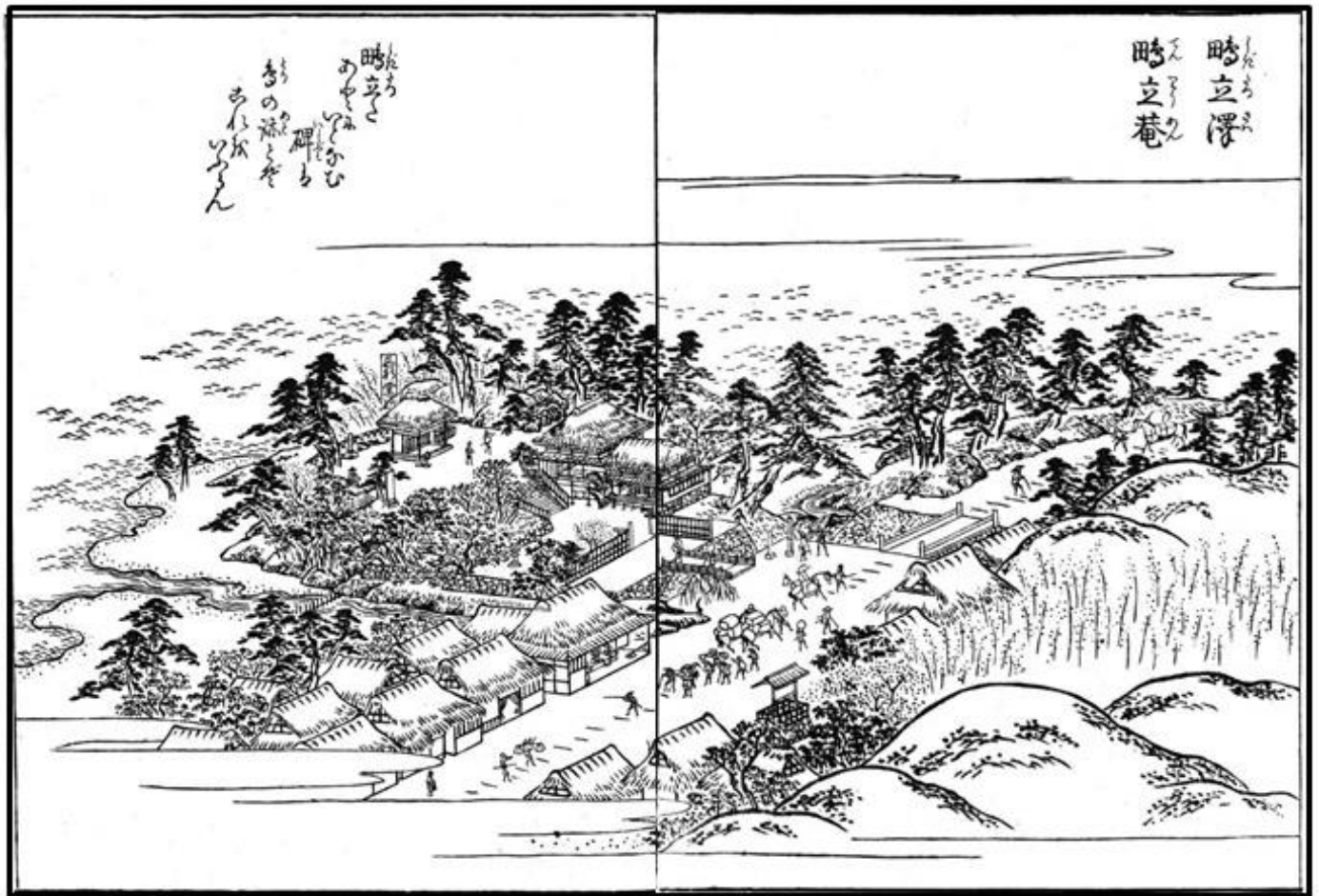


図8 東海道名所図会に描かれた「鳴立沢鳴立庵」

私は四、五歳の頃から、週末には必ず祖父母のもとをおとすられた。浜辺で遊びつかれると、いつも西行庵に行き、そこを自分のにわのように心得ていた。西行さんの名を知ったのも、「鳴立沢」の歌を覚えたのも、まだ物心つかぬうちで、それから70年も経た後に、その人について書こうとは夢にも思わなかった。祖父亡きあとは、私がしばらくその家に住んでいたこともある。他愛ない憶い出にすぎないが、よほどご縁があったに違いない。鳴立沢というのは固有名詞ではなく、鳴の立つ沢の意で、昔の連歌師や好家が、いいかげんにつけた地名であることを大人になってから知ったが、私の鳴立沢は、やはり大磯のあすこ以外にない。何度私はあの松林の中に立って、縹緲（ひょうびょう）と霞む海のかなたに、鳴が飛び立つ風景を夢見たことか。歌枕とはそうしたものであり、それでいいのだと私は思っている。』

今回は鳴立沢で終わってしまいましたので、次回は崇雪や大淀三千風とはいかなる人物か、なぜ崇雪は大磯に草庵を結びたかったのか等々、解を求めて再びしつこく調べまわってみようと思います。



■引用図表

図4 相模国「洵綾（ゆるぎ）郡」

https://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital_archives/rekishibunken55/pdf/column.pdf

図6 東海道名所図会 /下 秋里籬 ペリかん社 2001

図7 「白洲正子自伝」表紙

<https://blogs.yahoo.co.jp/cdta05/57231227.html>

図8 東海道名所図会 /下 秋里籬 ペリかん社 2001

■引用文献、参考文献

おおいその歴史 大磯町 大磯町 2009

大磯歴史物語 池田彦三郎 グロリア出版 1981

大磯町文化史 大磯町文化史編纂委員会 大磯町教育委員会 1956

西行 白洲正子 新潮文庫 1996

にほんどニッポン 松岡正剛 工作舎 2014

大磯学 伊藤嘉一/小中陽太郎他編 創森社 2013

西行の風景 桑子敏雄 日本放送出版協会 1999

東海道名所図会/下 秋里籬 ペリかん社 2001

